

# キリスト教教育に視聴覚教授法を 使用する可能性

津 川 牧 雄

目 次

序

## I. キリスト教教育に於ける視聴覚教授法の位置

1. キリスト教教育と人格形成
2. キリスト教教育に於ける題材と体験
3. キリスト教教育に於ける学習の意義

## II. キリスト教教育に於ける視聴覚教授法の価値

## III. キリスト教教育に於ける視聴覚教材の使用原則

## IV. キリスト教教育に於ける視聴覚教材の評価方法

## V. 視聴覚教材としてのキリスト教教育の教師

結 語

註

参考文献

序

キリスト教教育は、神の民共同体であるキリスト教会が、そのなす宣教の業の重要な一部分として考えられ進められてきたものである。それは、教会自体がイエス・キリストを人びとに宣べ伝え、提示し、イエス・キリストに従って共に生きるよう、あらゆる方法を尽して、人びとを神に導くのを使命とする団体であり、又その使命を教育的配慮をもって成し遂げて行くのがキリスト教教育であるからである。故に、キリスト教教育は神の民共同体である教会を離れては存在し得ないし、同時に、キリスト教教育のすべての業は神学的に正当な根拠を見出さねばならない。他方、キリスト教教育はやはり教育学的配慮を要する業でもあるから、その学習プロセスも、自づから教育学の特性を備えなければならないことは明らかである。故に、キリスト教教育を施行する場合、常に神学的反省がなされなければならないし、同時に、教育学的にも検討されなければならない。

人類はその歴史の始め、ただ言語によって思想をコミュニケーションして来た。それはごく単純なものであったが、時代の変遷とともに進歩し、時間と空間の制限を相当乗り越えた。又コミュニケーションに使われる器具と方法もずいぶんハイテク化した。教授法から言っても、一方通行的教授法 (One Way Communication) を使う教師は、教育にたずさわる者としては、もう落伍者である。

教師と生徒との間には、互いに反応しあうことが要求され、目標達成のため、共に探求することが是とされる。このような教授法の発展途上に「視聴覚教育」という新名詞が誕生してもはや

数十年立ち、視聴覚教材や機器も、時を経るに従って日進月歩し、目を見張らせるものがある。そして、キリスト教教育に於いても、視聴覚教授法を相当利用していることは周知のことである。しかし、キリスト教教育の業に、視聴覚教授法が適切に使用されているかどうかについては疑問が残る。われわれは、キリスト教教育の二大指導原則 (Guiding Principle) 即ち「神学的に正しい」ということと、「教育学的に効果がある」ということとを基礎に、キリスト教教育に視聴覚教授法を使用する可能性について再考しなければならない。

字数制限上、ここに述べるキリスト教教育とは、主として教会に於ける各分野の教育の業を指すが、クリスチャンスクール (含幼稚園・保育所) に於けるキリスト教教育も教会の信仰を基にした業であることから包含されるものである。

われわれは、キリスト教教育が、単に高度の教授技術によってのみ、その目的が達成されるものではないことをはっきり知っている。それは、教会が従事するすべての業が聖霊の助けに頼つてのみ、目標達成が可能となるからである。あたかもパウロが、「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である。」(I コリント 3 : 6) と言ったとおりである。

## I. キリスト教教育に於ける視聴覚教授法の位置

### 1. キリスト教教育と人格形成

人間は一般的に知覚から抽象的思考へと進み、認識を深め、同一視し (identify)、そしてその結果を実践するものである。いわば、感覚的体験から理性的認識へと進み、その成果を自分のものとして実行に移すものである。このような作用とプロセスを繰り返して人間は成長し、発達し、体験を積み重ねる。しかもこのような作用とプロセスとがより豊富で、より組織化され、より精密であればあるほど、その人間はより豊富な体験者となる。この際、接触するすべての環境 (事物) に対して、その人間が適当に対応し、適当に吸収して、正しい反応がなされるならば、その人間は人格的によく整ったものとなる。しかし、もし接触するすべての環境 (事物) に対して適当に対応し、浄化することができなかつたならば、その人間は人格的に欠陥のある人間となる。これがいわゆる後天的影響が先天的影響よりも大きいという意味である。

このように考えてくると、われわれは、人間とその生活環境との相互作用による体験の如何に重要であるかを強調したいし、又キリスト教教育それ自体が、信仰生活という環境の中での体験による、人格形成のわぎであるということを力説せずにはおられない。

キリスト教教育に於いて、人間の人格的発達を論じる場合、われわれは神の存在が人間の人格に及ぼす影響が多大であると確信するとともに、神が人間の生活環境のなかに占める分量と地位は、相当大であるということに疑わない。もし一人の人間が神と接触することができ、神に応答することができたならば、その人間の人格は巨大な変化をさせられるであろう。即ち、彼は改造されてクリスチャン人格者となるのである。それは、その人間の外形は変わらないが、彼の霊と生活の仕方が変わり、一人の新しい人間となることをいう。これは人類最大の、又最も意義のある人格発達の体験であって、これこそキリスト教教育を可能とする基本信念ともいべきものである。あたか

も米国プリンストン神学大学のキリスト教教育学部長であったC. ワイコフ (Campbell Wyckoff)がキリスト教教育の目的について、「われわれの関与している仕事とは、人間の人格的宗教改造及びその変化であって、人間をよく整ったクリスチャン生活ができるように到らしめることである。あらゆるキリスト教教育のプロセスは、まさしく人間のこういう人格的宗教改造及び変化のために、設計されたものでなければならない。これがキリスト教教育の基本問題である。故に、われわれは人間の人格的改造ならびに変化を期待して、各種の教育的体験をとおして生徒を導き、より整ったクリスチャンになるよう願うのである。」<sup>(註1)</sup>と言ったとおりである。

こういう神が人間の生活環境のなかで、人間の人格を改造し変化させていくということについて、聖書は、聖霊の助けにより人間はイエス・キリストを通して神を認識し、礼拝し、神の愛の中に生きると語る。故に、キリスト教信仰体験とクリスチャン人格の発達には明らかに聖霊にたより、イエス・キリストをとおして起こる以外にない。この場合聖霊とイエス・キリストとがクリスチャンにとり人格の改造及び変化に必要な環境であり存在である。

神と人間との間の人格改造関係以外に、人間の人格形成上、大きな影響を与えている環境を挙げるならば、それは人間というべきである。われわれの日常生活は、人間との関係から切り離せない。人間と接触することによって問題が発生し、そして問題の中で生活が営まれて行くわけであるが、それらの問題とは、お互いのニーズとかテンションなどであり、言い換えると、あらゆる問題とは、いわゆる関係の中での問題である。いわば、人間とは関係的環境の中で成長するものである。その場合、家庭、学校、社会という場を環境として人格形成がなされる。

われわれが人格形成の環境の一つとして家庭を挙げるとき、キリスト教教育の立場から、教会を考えざるを得ない。というのは、教会とは一つの大家庭であって、老若男女を問わず、信徒がここでキリスト教養育を受けるところであるからである。教会は信じるものに、神の愛を体験させる必要な各種の環境を提供し、信徒が生活をとおして、神の御旨を見出せるようにしなければならない。それは教会の共同体的生活の現実のなかで、即ちさまざまな表現やメディアをとおして、その生きた共通の体験に参加せしめ、全人格的に信仰の奥義をつかめさせるということである。こうすることにより、参与するものが、相愛し、相助け合うというあたかも血の連がりがある家庭の如き生活を送るのである。このような教会という大家庭環境のなかで育てられて、人間は神のかたちにかたどった人格者(創世記1:27)に立ち返る。こうして見ると、教会のわざであるキリスト教教育に於いては、当然、このような人格教育の環境を提供してくれる視聴覚教授法を重んじなくてはならないということが明らかである。

## 2. キリスト教教育に於ける題材と体験

イエス・キリストにあつての人格改造及び変化を体験することが、クリスチャンになるということであるが、正しいキリスト教教義を学ばなければ、当然正しいキリスト教教育は期待できない。というのは、教義が信仰の根拠であり、もしその信じる信仰の内容に、偏りを生じることになれば、その人間の神体験は不正確なものとなるからである。故に、キリスト教教育に於いては、教義を重視する。又キリスト教教育というものは、キリスト教会という具体的な共同体の生活の

## 津 川 牧 雄

なかで、その信仰内容が確かめられ、それによって人格が培われて行くわざであるから、当然そこには教え伝える信仰題材 (Subject matter) があるはずである。しかも、人間というものは体験しつつ成長し、発達し続ける存在であるから、その題材を概念化させ、象徴化させて行動化するのに必要な同一視 (identification) をするに至るようなプロセスが必要である。故に、信仰の題材は非常に重要ではあるが、生徒が学ぶときに、ぜひ必要な体験ができるよう配慮すべきである。その場合、生きた具体的な体験、そして新しい体験ほど価値がある。しかし、こういう体験は、必ずしもすべての教義や信仰内容を了解しなければならないとか、神学上の難問を解釈できるようにならねばならないというのではなく、イエス・キリストがそれぞれの程度に応じて、それぞれを彼に答えるよう体験させるのである。故に、キリスト教教育に於いては、題材が必要であるが、この題材というものは結局、キリスト教教育の追い求める終点ではない。それは終点に至るためのメディアに過ぎない。キリスト教教育の最終目的とは、人間をして、イエス・キリストを主として迎えさせて、一生彼に忠誠を尽すよう育てることにある。従って、礼拝・聖書研究・交わり・創造的表現・生活活動ならびに奉仕のわざなどを通して、この目的達成のため努力する。もしこの目的が達成できないならば、たとえわれわれの教える学課が信仰に関することであっても、それは結局ただの伝統や習慣的行事に過ぎず、或はわれわれが彫刻したキリスト教教育という偶像に過ぎない。であるから、キリスト教教育の教師は、キリスト教教育の目的達成のために最善の方法を考じるのは当然のことである。この為、各種の教具や教材を利用するとき、それらが必ずキリスト教教育の目的達成に至らせる体験に入らせるものでなければならない。今日多くのキリスト教教育のカリキュラム及びこれに関わる資料が、しきりに視聴覚教授法を活用するようすすめられているが、こういう意味で、われわれは、視聴覚教授法が果してキリスト教教育に有効であるか検討すべきである。

### 3. キリスト教教育に於ける学習の意義

キリスト教教育に於いては、教師が生徒を教えるというよりは、教師が生徒のために学習の環境を造るといった方が適当である。故に、こういう仕事にたずさわる教師は、生徒が効果的な学習体験ができるように導くあらゆる技術を知り、同時にそれらの技術に熟練しなければならない。

すでに述べたが、キリスト教信仰は体験をとおして認識し、同一視して実行に移されるものであるが、その中でも特に「創造的体験」に注意をはらいたい。何故なら「創造的体験」はいわゆる伝統的形式的信仰から離れて、信仰のメディアを瞭解するのに役立たせるからである。そしてこの創造的体験を、それぞれの程度に応じて利用することによって、引き続き、信仰を次の世代へと伝えていく。

E. デイル (Edgar Dale) は学生たちの反応を調査したのち、次のような報告をした。「われわれは二つの特別な傾向を見いだした。それは学生達が好きな教師というのは、よく学生に同情する人及び物事を上手に解釈する人である。」<sup>(註2)</sup> と。

確かに教師であるものは、どうかして生徒たちに同情することができる。彼は自づから生徒の靴を試しにはいて見るのもよいし、生徒たちのしゃべる話に聞き入るのもよい。こうすること

によって、彼は生徒の現時点的状況が分り、その状況の中で、如何なる方法を取るべきかが分ってくる。そのとき、生徒たちと教師との距離は縮められ、生徒たちは教師の暖かい情味を味わいつつ学習に精しむことになる。こういう意味で、教育とは、教師と生徒とが互いに耳を傾けてきく相互反応でもある。これをキリスト教教育の立場から言えば、人間の相互関係に於ける人格の培いであるというキリスト教教育の重要な基本観念でもある。故に、「教師と生徒の関係」という言葉はむしろ、「教師と生徒の相互反応関係」と言った方が適切であるし、教師と生徒は共に学ぶ伴侶でもあると言った方が良い。更に進んで考えると、「同情」というものは絶えず成長し変化するものでもある。それは範囲を拡大することでもでき、深度を深め、領域を広げることでもできる。以上のことから、教師は視聴覚教授法によって助けを求めることになる。

キリスト教教育にたずさわるものにとり、時間と空間の制限ということも、避けて通れない難点である。イエス・キリスト昇天後、いまだかつてイエス・キリスト在世当時の生活そのままを、実際に体験したものは一人もいない。故にわれわれが聖書の記事一切を完全にそのまま理解するのは至難のわざである。聖書の著作時代と現代とは、近いものでも約2000年の距たりがあり、一切の事情がまるで異なる。そういう訳で、われわれが学び得る聖書の知識とは、他人がくれた証しか研究成果にすぎない。であるから、教師は彼自身が聖書の語ることにについて自ら体験したものを、生徒によりよい体験ができるよう、工夫しなければならない。しかも、生徒たちが彼らの得た体験を他人に分ち与えることができるような工夫が必要となる。言い換えると、キリスト教教育の教師の責任とは、生徒に如何に学習するかを導き助けることであり、そして生徒の学習が生徒自身の生きた体験となるようにすることである。教師の喜びは、生徒自らが体験した聖書の教えを、自ら実践して生きることができるようになったということに外ならない。

次にデイルは良い教師とは物事を上手に解釈する人だといった。英語の“Explain”（解釈）はラテン語の“Explanre”から来た語で、展開という意味である。生徒と共に学び、生徒を助けて、設定された目標へと共に進むのが教師であるから、教師はチョークを使って物事を展開して解釈することもできるし、あらかじめ教材を列べた部屋へ連れこむことによって、物事を分らせることもできる。生徒を指導してドラマを演じさせることも可能であるし、実地に旅行して、観察させることも効果的である。要するに、あらゆる効果的なメディアを利用して、生徒自身がする解釈に教師は手をかさねなければならない。「教師は漠然とした知識の系列を教えるのではなく、理解を具体的につかませなければならない。」ということである。(註3)

更にわれわれが知らなければならないもう一つの良い教授法とは、生徒が如何にして自分自身を教えるかということをお教えることである。これはいわゆる助けられ導かれる学習から進んで、自分で学習するまでに至ることである。高橋勉は、「よい教材の利用は、教育者が授業のために用いるだけでなく、被教育者も随時自分の学習段階を進めていくために使われる方法でもあるから、学習の内容はもちろんのこと、学習に対する動機づけや、継続性のある学習意欲を持続させるのにも役立つものが望ましいのである。」(註4)と言ったとおりで、教師は、生徒が自分自身を教えるようになる教授法を使用することが期待される。ただし、教師自身がこのような生徒の効果的な学

## 津 川 牧 雄

習体験を持たなかったなら、彼は生徒が如何にして自分を教えるかを知る由もない。であるから、教師はそのような効果的な学習を生徒に得させようとする以前に、自ら効果的な学習体験者にならなければならない。世間には、人を矯正する資格を持った人は一人もいないし、又誰一人ほかの人から無理やりに矯正されたいものもない。ただ、自づから矯正を願い出るものにも、矯正がされ得る。だから誰も他人に自分の教えを強制することはできない。ただ自づからその教えを受け入れたい人にもそれができるのである。こういう訳で、キリスト教教育の教師は、イエス・キリスト、聖書、教会などについて正しい認識と体験をし、生きたキリストの証人となってこそ、始めて生徒を導き助けて神の愛を体験させ、神のみ旨を自ら追い求めさせて行くことができよう。

他方、教師はまた、生徒のニーズが絶えず変化しているという事実には注意すべきである。この絶えざる変化に応じるため、教師もまた絶えずいろいろと工夫して、自分の解釈をその時点の状況に符合させることが大切である。もし、学ぶことが生徒にとって不重要であり、不必要であるならば、生徒は進んで学ばないし、又興味を持って参与しない。こうなれば、その学習は無意味となり、時間の浪費あるのみである。考えられる最善の方法は、生徒を助けて、生徒自身に学習目標を決めさせることであろう。教師は生徒の好かない学習を強いることはできないが、生徒に興味のある体験を供与することによって、生徒を刺激し励まして自ら学ぶようにすることができる。これはまさしく学習とは、教師と生徒が共に学ぶことであるということを裏づけるものである。こういう生きた学習が進行するプロセスに於いて、生徒は自動的に古い観念を排除し、新しい観念を統合して、新しい自分となる。彼はある事物を拒む権利があると同時に、ある事物を喜んで受け入れる権利もあるからである。このようにして彼は一步一步自分を改造し、遂に人生の価値と意義を見出すであろう。また、彼の学習に於けるプロセスが、豊かにそして広くなれば、その学習によって得たものも、永久に忘れられないものとなる。こういう生きた教育のプロセスを、キリスト教教育はそれを称して「新たなる人になる配慮」と言うのである。

## II. キリスト教教育に於ける視聴覚教授法の価値

視聴覚教材は、一般教育に於いて、その使用上に制限があるものの、もし教師がその長所を理解し、適切に使用するならば、今までの教授上に於ける多くの難問は、解決されるであろう。

おおかたの教師は、次のような統計に同意している。

A. 人間は感覚機能によって外界の事物を認識するが、その能力の比率は次のとおりである。

①視覚85% ②聴覚10% ③触覚3% ④嗅覚2%

B. 人間はいくつかの方法で物事を記憶するが、その能力の比率は次のとおりである。

①聴く10% ②読む30% ③見る50% ④する90%

チャールス・ホーバン (Charles F. Hoban) とジェームス・フィン (James D. Finn) 及びエドガー・デイル (Edgar Dale) 三氏は共同研究の結果、もし視聴覚教材を適切に使用するならば、下記のような効果があるということを明らかにした。(註5)

① 視聴覚教材は、概念の正確な意義を解釈することができることから、教師と生徒との無意味

な問答を少なくする。

- ② 視聴覚教材は、非常に強い学習意欲を引き起こさせる。
- ③ 視聴覚教材は生徒を助けて、その学習の成果を長期間保持させる。
- ④ 視聴覚教材は、実際体験に貢献して、生徒の自主活動や自分自身とする学習を促進する。
- ⑤ 視聴覚教材は、生徒に或る種の思想を継続的に発展させる。映画は特にこの効果がある。
- ⑥ 視聴覚教材は、意味の瞭解を助けるので、新しい単語の解釈に役立つ。
- ⑦ 視聴覚教材は、その他の教材を使つては得られない多くの体験を得させ、学習上の効果・深度及び多様性に貢献できる。

キリスト教教育の使命は、イエス・キリストに一生忠誠を尽す信仰者の養育にあるので、当然その仕事は、聖書やキリスト教教義の学習に関するものではあるが、具体的には、生徒を導き助けてクリスチャンとしての体験に至らせ、実行に移させることであるということは、繰返し述べてきた。これは言うのが易く、なすのが至って困難である。何しろキリスト教教育の施行時間は短く、ややもすると、ただ時間に追われて何の結果も得られずに終わってしまう。であるから、教師はできる限り適当なメディアを使わねばならない。その適当なメディアとは視聴覚教材である。

先に述べた如く、教育専門家たちは、視聴覚教材が一般教育に大きい効果があることを見出したのであるが、われわれはキリスト教教育に於いても、視聴覚教材を適切に使用するならばやはり、多大な成果が得られると確信する。

事実、視覚を通しての表現は、長らく教会と密接な関係を保ってきた。パウロ・ヴィース (Paul Vieth) はその著書「教会に於ける視覚教材」(Visual Aids in the Church) で次のように指摘している。「教会に於ける視覚表現は悠久な栄誉の歴史を持ってきた。教会の建築・宗教芸術・ステンドグラス・バプテスマ・聖餐式・さまざまな象徴及び聖書物語のドラマなど、これら一切は皆視覚を通してのことであつて、これらによって教会は、福音を人間に提示したのである。」(註6)と。

研究の結果から見て、われわれは視聴覚教材がキリスト教教育に於いて、次のような価値があると総合できる。

- ① 注意力の集中を助けることができる。  
視聴覚教材は、一種の雰囲気を作って、生徒の精神を集中させることができる。
- ② 知識のコミュニケーションに強い印象を与えることができる。  
視聴覚教材を使うことによって、信仰上の証拠や特徴を生徒に深刻な印象を与えることができる。
- ③ 生徒の知能を刺激することができる。  
視聴覚教材の適切な使用によって、思考力や弁別力が効果的になる。
- ④ 情緒を刺激することができる。  
視聴覚教材を使用することによって、純粹にして強烈な情緒を刺戟し、クリスチャン人格態度を発展させて、クリスチャンとしての行為を実行させることができる。

津 川 牧 雄

⑤ 礼拝の雰囲気を作ることができる。

視聴覚教材は生徒に、礼拝のための心の準備をさせ、厳粛に礼拝を守るようにすることができる。

⑥ 正当な娯楽として使うこともできる。

楽しい交わりの一ときというものは、信仰生活には必要なものである。ただ単に一時的な娯楽としてのみ使わず、キリスト教教育のトータルなプログラムの一部分として配慮し、計画され、使われなければならない。また、当然その内容もキリスト教的価値があり、意義があるものでなければならない。

以上の諸点を考え合わせるとき、キリスト教教育に視聴覚教材を利用する場合、必ずキリスト教教育のトータルなカリキュラム及び教案と結び合わされて、使用されるべきであることが明らかである。

われわれはまた、キリスト教教育のカリキュラムの内容と目的とが根本的には、ただの知識のコミュニケーションではなく、信仰の養育であると信じているから、一切の聖書知識を教えるとき、必ず生徒の現実生活状況の中に於いてキリストに導くよう、セットされなければ無意味である。C. ワイコフ (D. Campbell Wyckoff) は、「キリスト教教育のカリキュラムは、学生を助けてクリスチャンにならせるのが目標である。」<sup>(註7)</sup>と言ったのは正しい。故に、教師はできるだけ視聴覚教材をメディアとして使用し、生徒をそのような信仰体験に導入するよう心掛けねばならない。教師は絶えず自分が採用している教材が、果してどれだけ生徒の生活を改め変えているかを自問すべきである。「もしあなたの教授法に変化がなかったら、どうして生徒に変化が生じることを期待できようか？」と W. ジェームス (William James) が指摘したが<sup>(註8)</sup>、われわれは全く同感である。

教師は自づから、その教えることが生徒にどういう効果をもたらしているかを検討すべきである。教師自身が、キリスト教真理の探求に興味を持たずして、ただ生徒に、真理の探求に興味を持つよう期待することはできない。生徒にはそれぞれ、たましいの啓発を助ける窓口があるのだから、教師はそれを善用すべく、適当な、しかも豊富な、教授法を身につけなければならない。このため、カリキュラム・教授法・教材を熟習するため、研修会などの機会に視聴覚教材を使うとよい。

礼拝は教会生活の中心である。教会を離れてはキリスト教教育はありえないのだから、キリスト教教育に於いても、当然礼拝の順序・内容及び方式を重視すると共に、教育学的見地から見ても、理想的な礼拝を守るべきである。この場合、視聴覚教材を応用すれば、良い礼拝の雰囲気を作り、み言葉のコミュニケーションを強く受け、より良い礼拝が守られるであろう。

良い経営と管理は、キリスト教教育の基礎を堅固にし、各部分の機能をその組織範囲内で、最高の効果を発揮させる。生徒は聴くよりも、見る方がよく認識できるのだから、よい教育環境とよい教学器具を備えることは、キリスト教教育上非常に重要なことである。教育の成敗は、大部分教師の才能に関われるが、それも適切な教学設備や器材を善用するかしないかによって異なる



ものである。

### Ⅲ. キリスト教教育に於ける視聴覚教材の使用原則

視聴覚教材を使用しているから、それで視聴覚教授法であるとはいえない。視聴覚教材の使用原則を理解し、周到な計画を立てて使用するのであれば、視聴覚教材は必ずしも常に、生徒によい結果を与えるとは限らないからである。

キリスト教教育に於ける視聴覚教材の使用原則をあげると：

- ① 視聴覚教材の内容と使用法は、必ずキリスト教信仰及び正しい教育原則と符合しなければならない。
- ② 視聴覚教授法は、ただ視聴覚教材を使っただけでは、それでキリスト教教育がなされたと考えてはならない。

視聴覚教授法とは視聴覚教材ではなく、視聴覚教材を使用して、キリスト教教育の目的を達成するための手段である。であるから、視聴覚教材は、ただ単なる娯楽のために使われてはならない。教材やその使用法にばかり気を使って、神のみ言葉に聞きいることを忘れてはならない。

- ③ 視聴覚教授法を礼拝に使用するとき、礼拝の本質である神との霊的交わりを、ゆるがせにしてはならない。
- ④ 視聴覚教授法は、全体の教育計画のなかに編みこまれなければならない。言いかえると、視聴覚教材を所定のカリキュラムの中に編入することである。
- ⑤ 視聴覚教授法は、それを始める前に十分慎重な計画と準備及び練習を必要とする。特に礼拝に使用するとき、このような計画と準備及び練習が十分なされないなら、使ってはならない。

- ⑥ フィクション教材（架空な人物・物語・小説）を使用することには制限が必要である。

フィクション教材を基にして、キリスト教の教義を説明したものや、情緒を刺激するために作ったフィクション教材は、キリスト教教育上或る程度の価値はあるが、聖書や歴史資料を説明する場合、あいまいなストーリーやフィクション資料または曲解されやすい資料を使ってはならない。

- ⑦ 視聴覚教授法を使用する場合、できるだけ生徒に多くの実際活動に参加させる方がよい。最も重要である効果的な教授法とは、生徒が自づからやることであるから、視聴覚教材を提示する反面、生徒にその教材使用の行動（action）に関与させることはよい事である。

- ⑧ 視聴覚教材を使用することによって、生徒が想像力を失ってはならない。

教材を提示したら、生徒本来の想像力を生かすことができなくなるとは、その視聴覚教材は有害である。教師が立て続けに画や映画を見せるなら、生徒は完全に頭を使って物事を考えるチャンスを失ってしまうからである。

- ⑨ 教師は視聴覚教材を使うことによって、あらかじめ設定した目標に向って進ませるべきで

津 川 牧 雄

あって、生徒の興味を分散し、誤った方向や無関係な目標へ心を走らせてはならない。

⑩ もしある種の視聴覚教材が、その他の教材よりも、より効果的に目標達成が可能であると確信したなら、その視聴覚教材を使うがよい。しかし、その選んだ視聴覚教材が、別により効果的だと思わないものであるなら、使うことはない。

⑪ 生徒に視聴覚教材の選択に参加させ、問題を提起して、問題の解決に協力すべきである。学習というものは、生徒を助けて古い問題を解決させて、新しい問題に取り組ませる努力でもあるからである。古い問題の答えが見つかり、そして新しい疑問が生まれるようなことが繰返される視聴覚教材の使用の仕方でありたいものである。

#### IV. キリスト教教育に於ける視聴覚教材の評価方法

視聴覚教材の使用原則を総合すると、われわれはそれが、教える教師と学ぶ生徒との二者の関係が、最も大切な基礎となっていることが、明らかにされたことが分る。つまり、視聴覚教材は単なる学習上の器材にすぎないという根本問題を、その使用原則を通して語っている。別の言い方ですと、視聴覚教材を使用することによって、生徒の学習体験を促がし、広げて行き、各課の目標に向かわせて、最終的にはキリスト教教育の目的に達するよう心掛けねばならないということである。であるから、教師は使用原則を離れての視聴覚教材の使い方は、避けるべきであると同時に、教えるものと学ぶものとの関係線上に常に立って、各課の授業を進行させることが肝要である。

キリスト教教育に於いて、視聴覚教材を正確に評価する標準を列举すると、次のとおりになる。

① 質の面から見て、使用される視聴覚教材は芸術価値があり、又相当な技術水準に達しているか？

② 使用される視聴覚教材は、生徒に正確な思想を供給するか？

提示した教材が、生徒に不正確な事実や間違った印象を与えるとしたら、結局間違った思想を学ばせることになる。

③ 使用される視聴覚教材は、生徒の年齢・知力・能力ならびに体験に適しているか？ これは、言語・思想・速度・範囲・心象及び象徴などを含む。

教師は彼と生徒の生活が、それぞれ異なった環境に影響されていて、それらの環境関係が彼と生徒とが共に学ぶ上に多大な関係があつて、利用する価値があるということを忘れてはならない。それ故、生徒がすでにある環境の中で、学習のために心の準備ができていのかどうか、また学習する能力があるかどうかを確かめるべきである。

④ 使用する視聴覚教材は、現在教える学課に意義ある内容を提供するか？ 或は現在やっている学習活動に、新鮮な意義を加えるか？ 又、所定の目標に達するための助けとなり得るか？

いくら良い視聴覚教材であっても、その日の学課の目標達成に役立たないなら不適當な教材である。

⑤ 使用する視聴覚教材は、生徒に、更に多くの興味を引き起こさせるか？

学習というものは、一時的なものではなく、生涯に亘るものであり、継続して行う努力であるし、古い知識から新しい知識へのプロセスであり、学習者自身の事業とも言える。生徒に、更に多くの学習をするよう刺激しないなら、良い視聴覚教材とは言えない。

⑥ 使用する視聴覚教材は完全であり破損していないか？

視聴覚教材を導入するとき、又は製作するとき、或は使用するとき、完全であるか破損しているかあらかじめチェックすべきであるし、又大事に保管すべきである。

⑦ 人物を視聴覚教材として使うとき、その人の演じ方が、教師の要求する思想内容に合っているかどうか？

人物を視聴覚教材に使うと、よく生きて来て変化があるが、生徒に間違っただけの印象や考え方を持たせてしまわないよう、あらかじめよく練習させておかねばならない。

⑧ 聖書や教会歴史に関する視聴覚教材（特に映画）は、その背景などを説明するため、いろいろ本文にない材料をさしこむことは許されるが、聖書本来の意味（教訓・記事）と符合しなければならない。

もしそれらの材料をことさら誇張すると、生徒は本来の意味を把握できずして、教師が設定した目標から離脱してしまうおそれがある。

⑨ 視聴覚教材の使用目的がはっきり分っていて、しかも終始一貫、その目的から離脱していないか？

一つの視聴覚教材が、必ずしもすべての学課に適合することはない。場合によっては、ある視聴覚教材がある学課の目標達成にのみ適することが多い。であるから、教師は終始一貫、その学課の学習目標と取り組んで適合した視聴覚教材を使うべきであり、学習目標から逸脱してはならない。

⑩ 使用する視聴覚教材は、人と人との関係を改善するか？

種族問題・民族問題及び文化問題に関わる視聴覚教材を取り扱うとき、特に差別など人間関係を損ねることのないよう注意をはらうべきである。

⑪ 使用する視聴覚教材には、生徒のニーズと興味とを結びつける接点があるか？

使用する視聴覚教材が、生徒にニーズと興味とを感じさせないなら、生徒の学習欲を封じたのも同様で、教師の一切の準備と努力は、水泡に帰したと行ってよい。何しろ、誰一人としてむやみに（無造作に）、他人を教えることはできない。ただその他人が、喜んで教えてくれるよう願ったときにのみ可能である。

⑫ もし幾多の視聴覚教材が、皆予期した目標達成に適合するなら、教師はそのなかで最も有効なもの、即ち最も生徒を助けて予期した目標に達することができ、しかも、その後も継続して、その得たものを発展させて行けるものを、選ぶべきである。

教師が慎まなければならないことは、あらゆる適当だと認めた視聴覚教材を選択なしに、あれもこれもと、立て続けに使用することである。われわれは、常に視聴覚教授法そのもの

が、根本的に娯楽が第一の目的ではないことを、頭の中に刻み込まなければならない。

#### V. 視聴覚教材としてのキリスト教教育の教師

キリスト教教育の目的については、今まで数多くの表現でもって定義されて来たが<sup>(註9)</sup>、要するにそれは、一生キリストに忠誠を尽すクリスチャン生活をするよう養育するものであると言ってよい。<sup>(註10)</sup> これはつまり、ただ聖書の題材 (subject matter) を教えることではなく、イエス・キリストを主として受け入れ、一生彼に聞き従う人格者となるよう教育することであり、いわば、キリスト教信仰をもった人格形成のわざである。

こういう人格形成のわざにたずさわるキリスト教教育の最重要課題は、言うまでもなく教師の資質にある。一般教育に於いて、教育の効果はカリキュラムに負うところ10%であり、残る90%は教師に負うと言われているが、キリスト教信仰をもった人格への形成をするキリスト教教育は、なおさら教師の資質を問わねばならない。故に、キリスト教教育は正に教師論に尽きると言うべきである。言い換えると、キリストに忠誠を尽すクリスチャン生活をしている教師でこそ始めて、生徒をキリストに一生忠誠を誓う人格者に育てることが可能であると言ってよい。

原来、キリスト教信仰は人格的な出会いの産物であるともいえる。神は生きた人格者 (person) である。故に、神について知ることも人格的 (personal way) であり、神と人との出会いも人格対人格 (person-to-person) 的なものである。しかもその際、人間は全人格的な応答を神に求められている。<sup>(註11)</sup> したがって、キリスト教教育の教師は、キリスト教教育のわざをなすとき、生徒が神との人格的出会い (personal encounter)、つまり神との人格的コミュニケーションが可能な環境を造らねばならない。

このように考えてくると、適当に視聴覚教材を使用すれば、キリスト教教育は効果的に改善されるとは手放しで言えない。と言うのは、視聴覚教材というものは、あくまで“物”であって“者”ではないからである。人格的コミュニケーションは人格によってのみできる。あたかも波多野完治がその著「視聴覚コミュニケーションと現代」の中で、「技術は人格のとびらを開く鍵をつくらない。人格のとびらは人格によってのみ開ける。」と言ったとおりである<sup>(註12)</sup> 榎田馨・土橋美歩共著「視聴覚教育」は、「視聴覚メディアを使うことを即視聴覚コミュニケーションと言えるか、映画やテレビやテープや写真を使えばそれで単純に視聴覚的方法であるとしてよいだろうか。これでは形式のみ問題にして内容が忘れられやすい。内容から見て、メディアは視聴覚でもメッセージが視聴覚化されているかどうかをさらに問題としてみなくてはならない。」<sup>(註13)</sup> といっているが、たしかに、視聴覚教材を使うから即視聴覚教授法だとは言えない。形こそ視聴覚教材ではあるが、使う教師の人格が伴わないかぎり、それは真の教育がなされているとは言えないからである。視聴覚教材を使って語られる福音をとおして、具体的に教師の人格と生徒の人格とが触れ合わないかぎり、厳密に言って聖書のメッセージが生徒にコミュニケーションされたとは思えない。キリスト教教育であるからには、このような人格的コミュニケーションが阻害されるなら、むしろ視聴覚教授法を使うのは止めた方がよい。

一方、キリスト教教育とは、一生キリストに忠誠を誓うよう生徒を人格的に育てることであると述べたが、ならば、このような人格教育をする教師自身、キリスト教教育に於ける最も素晴らしい視聴覚教材であると言わなければならない。生徒は神と出会う以前に教師と出会う。神との人格的出会いをしつつある教師をとおして、生徒は神との人格的出会いがうながされる。この意味に於いて、キリスト教教育の教師は、生徒にとり、最も奥深いコミュニケーションのメディアというべきであろう。

もともと、キリスト教信仰というものは、キリスト教共同体の中で培かわれるものであるが、それはわれわれが共にクリスチャンであろうとする努力の結果であるともいえる。それは、キリスト教共同体の中での信仰の分かち合いであり、具体的には、信仰のこどもたちが信仰の大人たちにクリスチャン生活を学ぶものである。故に、大切なのは、われわれが分かち合おうとしているものが何かである。J. H. ウェスタホフはその著“Will Our Children Have Faith?”のなかで、エンカルチュレーション (enculturation) ということばを使って、キリスト教共同体の中での相互の関わり合いの活動という概念でもって、キリスト教教育を説明しているが、<sup>(註14)</sup> 事実、ともすれば、教師が生徒に聖書のメッセージを教えることだけに熱中して、自らの信仰や生活について深く顧みずにいるのではないかという強い問いが常になされなければならない。真にキリスト教教育の教師であれば、全人格的に認められる生き方があるはずである。このような生き方をしてい人格者が生徒の前に立ったとき、生徒の人格のとびらは開き、キリスト教信仰と生活についての理解と生き方とがコミュニケーションされて行くのである。したがって、このようなキリスト教教育の教師自身、もっとも素晴らしい視聴覚教材となるのである。

さらに、広い意味で考えたとき、神の民共同体（教会）は、キリスト教教育に於ける教師であるとも言える。キリスト教教育の主体が神の民共同体であり、この共同体の信仰と生活がキリスト教教育の教師を産み、そしてこの教師がその共同体の信仰と生活の枠ぐみの中で、キリスト教教育のわざにたずさわり、生徒をしてキリストに忠誠を誓うよう養育するのであるからには、この共同体そのものが生徒に直接間接与える影響は大きいといわねばならない。C. ワイコフ (D. Campbell Wyckoff) は、キリスト教教育は教会そのものがどういう状態であり、どういう体験を生徒に与えるかに大きく頼っていると断言している。<sup>(註15)</sup> 教会の信仰と生活に学び、教会の信仰と生活に関わって行ってこそキリスト教教育があり、キリスト教教育の目標が達成されるのである。<sup>(註16)</sup> 教会をぬきにしてのキリスト教教育教師の一人芝居はあり得ない。「教会のないところにキリスト教教育はない」と C. ダイクストラ (Craig R. Dykstra) は言った。<sup>(註17)</sup> 教会が教会らしくないなら、キリスト教教育の教師がいくら視聴覚教授法を善用しても、その効果は期待できないであろう。

## 結 語

C. ワイコフ (D. Campbell Wyckoff) は、その著書「キリスト教教育の課題」 (The Task of Christian Education) の中で、「クリスチャンはいつもキリスト教信仰或はキリスト教会との関

## 津 川 牧 雄

係から逸脱している。」<sup>(註18)</sup>と忠告しているが、キリスト教教育の教師は、生徒がイエス・キリストに忠誠を尽しつつあるかどうかを常に見守るべきである。そして、賢明な教師は視聴覚教授法を熟知し、適切に使用して、最も効果的なキリスト教教育を施さねばならない。これは勿論立て続けに、いくつもの視聴覚教材を使って、生徒を喜ばせるということではない。もし周到な計画がなく、選択して使用することがないならば、視聴覚教材はかえって有害なものとなるからである。そのような使い方は、ただ生徒の情緒方面に満足を与え、人生の難問を解決する助けにはならない。かりに、教会で上映する映画が適切に福音を提示しないならば、教会は映画館に変わり、教会は教会でなくなるし、教師の存在は失くなってしまう。長篇の映画は教師の教授特権を奪いさる可能性が十分あり、教室に於いて教師が果たすべき神聖な教育使命が、達成できないおそれがある。こういう状況になった場合、教師は教室から追い出されたことになり、生徒を人格的に教え導く人は失くなってしまい、教師の人格と生徒の人格の触れ合いがないことになり、キリスト教教育が阻害されることになる。

視聴覚教育ということばができてから、もう数十年の歳月が立つが、事実視聴覚教育はもう随分昔からあった。イエス・キリストの降誕・十字架の受難・復活などの事実は、神が人類に施行された貴重な視聴覚教授法とも言うべきである。教会が遵守している聖餐式、使用している十字架・聖書ならびにその他一切の象徴はすべて視聴覚教材であることは間違いない。これは、神が人間には視聴覚教授法が必要であるとお考えで、このように視聴覚教材を使用 されて、神の愛と義を示されたものであるといえよう。

視聴覚教授法は、個人的な学習に貢献するとともに、団体の学習に役立つし、両親教育の助けになるのみならず、教師自身の学習にも功を奏する。又各年齢層の人びとにも効果的な学習経験を供給することは明らかである。視聴覚教材は、全世界を教室へ持ちこむことができるし、生徒を全世界の到るところへ連れて行くことも可能にする。視聴覚教材はまた、生徒をキリストにある交わりの中に導き入れ、そして現実社会へ入って、かずかずの社会難問に対し、勇敢に直面させることができる。こういう訳で、教師はできるだけ視聴覚教材を善用するよう心掛けなければならないが、同時に、視聴覚教材使用上の諸問題に注意をはらい、キリスト教教育の目的から逸脱してはならない。それはつまり、キリスト教教育というものは、イエス・キリストに導くための人格教育である故、ただ上手に視聴覚教材を生徒の前に提示したらよいというものではないからである。むしろ、教師は最もすばらしい視聴覚教材そのものとなって、最も効果的な信仰教育を進めるべきである。いわば、福音のメッセンジャーとして、自づから福音のメッセージを伝える「場」(context)となり、「器」となることである。言い換えると、一人の視聴覚教授法の上手な教師である前に、一人の生きた信仰生活をしているクリスチャン人格者であらねばならない。これは丁度 C. ワイコフが、「キリスト教教育はあくまで教師の信仰と生活に深く関わるものである。何故なら、キリスト教教育の学習の中心は、福音に対する目醒めと応答であり、これらはあきらかに信仰と生活の特性であるといわねばならない。……したがって、キリスト教教育の教師にとって目標達成のためのプロセスとは、聖霊の働きのもとでの業なのである。」<sup>(註19)</sup>と言ってキリスト教

教育の目標について述べたとき語ったとおりである。したがって、キリスト教教育の教師の直面している問題とは、新しいカリキュラムや新しいプログラム又は新奇な教授法ではなく、むしろ、教師自身福音によって自らの人格的変革を体験し、生きた信仰生活を送っているかどうかであると言わざるを得ない。そういう自らの人格的変革を体験し、イエス・キリストに一生忠誠を尽す生活を生きるののであれば、如何なるよい視聴覚教材も自分を助けるものとはならないし、生徒をもイエス・キリストに忠誠を尽すような人格者に育てることはできないであろう。

### 註

- (1) D. Campbell Wyckoff, "The Task of Christian Education", P. 111.
- (2) Dale Edgar, "Audio-Visual Methods in Teaching", P. 5.
- (3) 阪本越郎著有光成徳増補, 「視聴覚教育入門」 P. 18.
- (4) 高橋 勉著, 「視聴覚教育の方法」 P. 23.
- (5) Dale Edgar, "Audio-Visual Methods in Teaching", P. 65.
- (6) Paul H. Vieth, "Visual Aids in the Church", P. 38.
- (7) D. Campbell Wyckoff, "The Task of Christian Education", P. 31.
- (8) Edgar Dale, "Audio-Visual Methods in Teaching," P. 65.
- (9) 北陸学院短期大学紀要第9号, P. 26.
- (10) 北陸学院短期大学紀要第10号, P. 10.
- (11) Iris V. Cully, "The Dynamics of Christian Education", P. 84.
- (12) 波多野完治編, 「視聴覚コミュニケーションと現代の教育」 P. 20.
- (13) 榎田 馨・土橋美歩共著, 「視聴覚教育」 P. 10.
- (14) John H. Westerhoff III, "Will Our Children Have Faith?", P. 86.
- (15) Craig R. Dykstra, "No Longer Strangers: The Church and Its Educational Ministry", The Princeton Seminary Bulletin, Volume VI, Number 3, New Series 1985, P. 199-200.
- (16) *ibid.*, P. 191.
- (17) *ibid.*, P. 200.
- (18) D. Campbell Wyckoff, "Learning and Teaching in the Spirit", The Princeton Seminary Bulletin, Volume VII, Number 1, New Series 1986, P. 46.
- (19) *ibid.*, P. 46.

### 参 考 文 献

- Bachman, John W., "How to use Audio-Visual Materials", Association Press, New York, 1956.  
Cully, Iris V, "The Dynamics of Christian Education", The Westminster Press, Philadelphia, 1958.  
Dale, Edgar, "Audio-Visual Methods in Teaching", The Dryden Press, New York, 1954.  
波多野完治著. 「視聴覚コミュニケーションと現代の教育」. 明治図書出版株式会社, 1970.  
小林公一編著. 「キリスト教教育の背景」. ヨルダン社, 1979.  
キリスト教教育講座. 第1巻～第4巻. 新教出版社, 1958.  
榎田 馨・土橋美歩共著. 「視聴覚教育」. 学芸図書株式会社, 1982.  
Millor, R. Crump, "Education for Christian Living", Prentice-Hall, Englewood Cliffs, 1956.  
日本基督教団教育委員会編. 「教会教育ガイド」, 日本基督教団出版局, 1982.  
日本日曜学校助成協会編. 「視聴覚教材ハンドブック」, 1986.  
日本視聴覚教材センター. 「視聴覚教材の効果的利用法」, 1984.

津 川 牧 雄

- Princeton Theological Seminary, "The Princeton Seminary Bulletin", Volume VI, Number 3, New Series, 1985.
- Princeton Theological Seminary, "The Princeton Seminary Bulletin", Volume VII, Number 1, New Series, 1986.
- Russell, Letty M 原著. 今橋 朗・岸本羊一・山内一郎訳, 「キリスト教教育の革新」. 新教出版社, 1971.
- 阪本越郎著. 「視聴覚教育入門」. 内田老鶴圃新社, 1976.
- Sherrill, Lewis Joseph, "The Struggle of the Soul", The MacMillan Company, New York, 1958.
- Smart, James D., "The Teaching Ministry of the Church", The Westminster Press, 1954.
- 高橋 勉著. 「視聴覚教育の方法」. 明治図書出版株式会社. 1968.
- Tower, Howard E., "Church Use of Audio-Visual", Abingdon Cokesbury Press, New York Nashville, 1950.
- Vieth Paul H., Rogers, William L., "Visual Aids in the Church", The Christian Education Press, Philadelphia, 1946.
- Westerhoff III, John H., "Will Our Children Have Faith?", The Seabury Press, New York, 1976.
- Wyckoff, D. Campbell, "The Task of Christian Education", The Westminster Press, Philadelphia, 1955.
- Wyckoff, D. Campbell, "The Gospel and Christian Education", The Westminster Press, Philadelphia, 1959.
- Wyckoff, D. Campbell. "Theory and Design of Christian Education Curriculum," The Westminster Press, Philadelphia, 1961.
- 山内一郎著. 「神学とキリスト教教育」. 日本基督教団出版局, 1973.